

コシノヒロコ

年譜

- 1937年 大阪岸和田市に生まれる
- 1957年 文化服装学院在学中にN.D.C.（日本デザイナー協会）デザインコンクール第1位受賞
- 1961年 文化服装学院を卒業後、銀座小松ストアー（現ギンザコマツ）ヤングレディースコーナー専属デザイナーとなる
- 1964年 大阪心齋橋にオートクチュール・アトリエを開設
- 1977年 TD6（Top Designer 6）参加
東京コレクション参加。以後現在に至るまで年2回出品
- 1978年 ローマ、アルタ・モーダに日本人として初めて参加。センセーショナルなデビューを飾り、『イタリアン・ハーバース・バザー』誌で特集が組まれる
- 1982年 ヒロココシノインターナショナル株式会社を設立、代表取締役役に就任
婦人服プレタポルテ、ライセンス活動を展開
パリ・プレタポルテコレクションに参加。以後年2回参加
- 1983年 財団法人大阪21世紀協会専門委員に就任
大阪21世紀協会のイベントとして、ヒロコ、ジュンコ、ミチコの3人ショーを開催
- 1984年 中国・上海で日本人として初めてのコレクションを錦江倶楽部にて開催
- 1985年 東京オフィス開設
東京ファッションデザイナーズ協議会（CFD）メンバーとなる
社団法人関西経済同友会会員に就任
社団法人日本デザイナークラブ名誉会員となる
- 1987年 大阪府、大阪市、経済界の協力を得て第1回大阪コレクションをマイドームおおさかにて開催
韓国・ソウルにてコレクションを発表
- 1988年 株式会社ヒロココシノデザインオフィス設立、代表取締役社長に就任
ヒロココシノインターナショナル株式会社取締役会長に就任
- 1989年 ワールド・ファッション・フェア（WFF）推進協議会実行委員会委員に就任
- 1990年 C.O.D.（コレクティブ・オブ・オオサカデザイナーズ）結成、同会長に就任
- 1991年 ヒロココシノデザインオフィス・パリを開設
- 1993年 パリコレクション参加10年を機にコレクション参加を中止、パリオフィス閉鎖
- 1994年 チェコ共和国・プラハにて建築家ボレック・シベック、演出家バンビ・ウデンとのコラボレーション「トワイライト・モード」を開催
大阪・近鉄アート館にて「コシノヒロコ展」を開催、作品図書を発表
- 1995年 アメリカ・ワシントンで開催された国際アパレル連盟総会でアジア代表デザイナーとして講演
- 1996年 帝国ホテル大阪のスタッフユニフォームをデザイン
- 1997年 大阪コレクションにて、大阪府知事、大阪市長をモデルに迎えヒロココシノ・オム・コレクションを発表
ブランド設立15周年、デザイナー創作40周年を迎える
第15回毎日ファッション大賞受賞
コシノヒロコ作品集『HK2001』を出版
- 1998年 近つ飛鳥博物館にて作曲家三枝成彰氏とのファッションイベント「Fashion Vision 21」を開催
- 2000年 ドイツ・ハンブルグにて空間デザイナー、クリスチャン・ベジャール氏とのファッション・コラボレーション「タクタイル・センセーション（触覚革命）」を開催
初来日のジュネーブのバレエ団、グランド・シアター・ドゥ・ジュネーブの舞台衣装をデザイン
- 2001年 郷里、大阪岸和田市にて、ヒロコ、ジュンコ、ミチコ3姉妹のコレクションを開催
芦屋・奥池にアトリエ、ギャラリー&ゲストハウス「SEMPER」が完成
平成13年度大阪芸術賞受賞
- 2002年 「仄かと思き」展と題した墨絵の個展を東京、札幌、小倉にて開催
- 2003年 コレクション作品抜粋と水墨画を中心とした「コシノヒロコの仕事展」を大阪・近鉄アート館にて開催
- 2004年 芦屋市からの要請を受け、ファッションをはじめ書画、絵画などこれまでの創作活動の集大成として「コシノヒロコ展」を芦屋市立美術博物館にて開催
- 2005年 小池百合子環境相からの依頼により、男性の夏の省エネファッション「COOL BIZ」のプロデューサーとして各界に協力を呼びかけ、また自ら提案を行った
- 2006年 大丸ミュージアム・東京にて、コシノヒロコ、老舗呉服店・菅田屋源兵衛、建築家・隈研吾らとのコラボレーションによる「襲展」を開催。伝統工芸である小石丸を使用したきもの・帯に直接筆を入れデザイン
- 2007年 デザイナー生活50周年を迎える
中国上海国際芸術祭に参加。音楽家マイケル・ナイマンとのコラボレーションイベント「Anomalous Duality（ありえない組み合わせ）」を開催
- 2008年 株式会社ヒロココシノデザインオフィスから株式会社ヒロココシノに社名変更
- 2009年 15年以上のブランクを経て、パリコレクションに再び参加
中華民国紡績業拓展會主催の「Taipei in Style」へShiatzy Chenとともに招聘され、コレクションを披露
台湾実践大学より、外国人として初めて名誉教授の称号を授受
- 2010年 コレクション作品のほかテキストスタイルデザインも展示、細部まで見て触れることのできる展覧会形式にてパリコレクションを発表
北京服装学院主催の国際会議「国際服飾文化教育研討会」に招聘され記念講演、学院の名誉教授を拝命。会議最終日にはコレクションを披露
- 2011年 パリコレクションへの参加を中止し、ファッションとアートの展覧会「Hiroko Koshino Creations 2011」をパリ装飾芸術美術館にて開催
- 2012年 パリのギャラリーHors Champsにて、アーティストとして初の絵画個展
夏季ロンドンオリンピック体操競技日本代表のユニフォームをデザイン
アーティスト小篠弘子の作品を発表する場として、KHギャラリー銀座をオープン
- 2013年 姫路山陽百貨店美術画廊にて「小篠弘子 アートの世界」展を開催
芦屋の自宅をギャラリーに改装し、KHギャラリー芦屋としてオープン
国際大会に出場する体操競技・トランポリン日本代表選手の公式ウェアをデザイン
阪神梅田本店美術画廊にて「小篠弘子 絵筆で紡ぐアートの世界」を開催
大丸心齋橋店にて「小篠弘子 絵筆の贈り物」を開催
- 2014年 パリの老舗画廊ギャルリー・ニコラ・ドゥマンにて個展
- 2015年 「淡路花博2015花みどりフェア」にて、華道家・片桐功敦との「みどり」とアートのコラボレーションオブジェを展示、ファッションとアートを融合させた「HIROKO KOSHINO EXHIBITION —コシノヒロコ展—」を開催
大丸心齋橋店にて「コシノヒロコ展 —絵筆の軌跡—」を開催
- 2016年 株式会社ヒロココシノ 代表取締役会長に就任
大阪Air Galleryにて「ヒロココシノ Black & White -墨と余白-」展を開催
兵庫県泉勢高揚功労を受賞
東京都産業労働局「東京ブランドのあり方検討会」委員に就任
- 2017年 Global Summit of Women 2017にてThe Business of Fashion and Designセッションのパネリストを務める
デザイナー60周年記念本『HIROKO KOSHINO | it is as it is あるがまま ながるがまま』を出版
- 2018年 神戸ファッション美術館 名誉館長就任
ニューヨークのWhite Boxにて、「コシノヒロコ：パウハウスの香り」を開催

HIROKO KOSHINO

コシノヒロコ 創作の軌跡

コシノヒロコは、呉服商の祖父、テーラーの父、洋装店を営む母という小篠家の長女として大阪府岸和田市に生まれた。ヒロコは、幼い頃から祖父の影響で「きもの」という日本の官能的な美しさと、父母の作る「洋装：モード」のふたつの影響を受けて育った。彼女のひとつのアイデンティティである「東洋と西洋を融合させた美しさ」は、幼い頃からこうした恵まれた環境のなかで育まれていった。

1950年から1960年代はヒロコの才能がつぼみから開花に至る時機であった。東京・文化服装学院デザイン科に進んだヒロコは、恵まれた絵の才能を発揮し、在学中から日本デザイナー協会（N.D.C.）主催のデザインコンクール第1位受賞ほか多くのデザインコンテストで賞に輝くなど、華々しい活躍を見せた。当時の文化服装学院は、コシノヒロコに続いて、高田賢三、山本耀司、熊谷登喜夫、彼女の妹であるコシノジュンコなど、才能溢れる若いデザイナーが在学していた。70年代後半に彼らは東京コレクションの前身であるTD6を結成し、80年代に入ってこぞってパリコレクションに参加することになる。

文化服装学院卒業後、コシノヒロコは母が営む岸和田の洋装店を継ぎながら、銀座小松ストアー（現ギンザコマツ）の専属デザイナーを務めた後、大阪の一等地である心斎橋にオートクチュールのアトリエを開設した。ドライフラワーやアンティーク、そして当時としてはかなり斬新な洋服が飾ってある店はすぐさま評判を呼び、幾つものライセンスデザインの仕事が舞い込んだが、毎シーズンコレクションを開くための財政的な苦労は絶えなかった。「振り返ってみれば辛い時代だった」と語るヒロコだが、当時はまだ26歳という若いデザイナー、デザインすることが楽しくて仕方がない時期でもあった。ちなみに、後に高田賢三のアシスタントを経てパリでアトリエを開いた入江末男は、この頃アトリエスタッフとして採用され、その後、渡仏するまでコシノヒロコのもとで働いている。

1970年代は、ヒロコにとって飛躍の時代だった。TD6に参加し、東京でコレクションを開催するようになる。また初の海外活動として、ローマで開催されていたアルタモーダに日本人として初めて参加。イタリアの伝統職人とともに素材を開発し制作した作品はローマで新鮮な驚きと感動を与え、『イタリアン・ハーバースパザー』誌では、ヒロココシノだけで30ページの特集を組んだほどのセンセーショナルなデビューコレクションだった。「東洋と西洋が融合する美」というコシノヒロコのアイデンティティが海外で高く評価されたのは、この頃からだった。

1980年代にはさらに大きな飛躍の時を迎え、コシノヒロコにとって、もっとも多忙を極めた時期となった。1982年にパリ・プレタポルテコレクションに参加、海外での活動も広範囲にわたった。中国・上海、韓国・ソウルなどで、いずれも招聘されてコレクションを発表している。こうした活動によってフランス、イタリアをはじめとしたヨーロッパ、そしてアジアでも、彼女の名前は広く知られるようになっていった。しかしその一方で、彼女が郷里のファッション振興のために献身的に活動したのは、大阪コレクションの創設。東京コレクションを主催する東京ファッションデザイナーズ協議会（CFD）のメンバーとなる一方で、「大阪からアジアへ」という掛け声のもとに発足された大阪21世紀協会専門委員となった彼女が中心となって、大阪コレクションが開催された。このため、この頃のヒロコは、毎シーズン、パリ、東京、大阪の3カ所でコレクションを発表している。

1990年代、コシノヒロコの創作活動はさらに世界に広がった。毎シーズンのコレクションの合間を縫う形で、チェコ共和国・プラハにて、建築家ボレック・シーベックと演出家バンビ・ウデンとのコラボレーションを開催、アメリカ・ワシントン市で開催された国際アパレル連盟総会ではアジア代表デザイナーとして講演を行っている。また国内でも、幼い頃から嗜んでいた書を揮毫した「コシノヒロコ展」を大阪の近鉄アート館で開催。ファッションと離れた作品展だったが、開催と同時に美術評論の世界で話題となり、あらためて彼女の深い造詣、多彩な能力を世に知らしめることとなった。1997年にデザイナー創作活動40周年を迎えたヒロコは、40周年記念作品集『H K 2001』を出版、さらに、長年にわたる国内、海外での活動が高く評価され、毎日新聞社が主催する毎日ファッション大賞を受賞する。

ひとつの節目を迎えた後も創作活動は休むことなく続き、大阪府・近つ飛鳥博物館で作曲家三枝成彰氏とのコラボレーションによる「Fashion Vision 21」を開催、さらに初来日公演したジュネーブのパレエ団、グランド・シアター・ドゥ・ジュネーブの衣装デザインを担当した。海外でも、ドイツ・ハンブルクにて空間デザイナー、クルスチャン・ベジャールとのファッション・コラボレーション「TACTILE SENSATION」（触覚革命）に取り組んだ。

2000年代はヒロコにとって円熟期に入ったといえるだろう。2001年には自らの制作活動の環境を整えるべく、大阪湾を一望する絶景の地・兵庫県芦屋市奥池にアトリエ&ゲストハウス「SEMPER」を建設。翌年からは、コレクション作品抜粋と水墨画を中心とした展覧会を日本各地で開催。続いて芦屋市からの要請を受け、ファッションをはじめ書画、絵画などこれまでの創作活動の集大成として「コシノヒロコ展」を芦屋市立美術館にて開催した。

この展覧会開催が、コシノに新たな分野のクリエイションに挑戦させる機会となる。京都で270年の伝統を持つ帯匠・菅田屋源兵衛がこの展覧会を観覧し、コラボレーションを申し出、全く新しいきもの、帯の創作に取り組む始めるのである。ここでは、長年ヒロコが培ってきた日本の伝統文化と西洋文化との融合であるファッションデザインが、逆に日本古来の衣装「きもの」に取り込まれ、和でありながらモダンなエキゾチシズムを合わせ持つ迫力あふれるきものデザインが誕生した。このきものと帯の展覧会「襲（かさね）」展を、大丸東京店・大丸ミュージアムで開催。会場設計デザインに建築家・隈研吾が参画し、苔の敷き詰められた丘が設けられた会場は、ドラマチックな照明効果と相まって、感動的な展覧会となった。

この間、杵屋禄宣（現・杵屋勝禄）に師事し、14歳から親しんでいた長唄三味線を学び直している。「杵屋禄宣女」の名を取り、国立文楽劇場での発表会では二度目の参加で大トリを務め、難物とされる「勸進帳」で会場を興奮の渦に巻き込んだ。ファッションのみならず、書画、絵画、三味線と幅広い分野でその能力を発揮することこそが、コシノヒロコのクリエイティビティのパワフルな原動力になっていることを、まざまざと印象づける出来事であった。

その一方で、この時期には重要なデザイン社会活動にも携わっている。地球温暖化防止策の一環として当時の小池百合子環境大臣から依頼された、男性ビジネスウエアのクールダウン化のためのデザイン提案。このファッションは「Cool Biz」と命名され、この夏の一大ウエーブとして社会現象にまで発展、その後も年中行事として定着するに至っている。

HIROKO KOSHINO

2007年にデザイナー生活50周年を迎えたコシノヒロコだが、創作に対するその情熱が失われることはなかった。英国の音楽家マイケル・ナイマンと知り合ったことを機に、中国・上海にて合同イベントを開催。この年に発表した134点のコレクション作品を30人の中国人モデルが纏い会場を魅了する一方、この舞台のためにデザインした衣装に身を包んだ上海歌劇院舞劇団所属ダンサー30人が、マイケル・ナイマン・カルテットの演奏曲をバックに華麗なる舞踊を披露、息をのむようなパフォーマンスで2,000人も観客を大いに沸かせた。

日本国内で確固たる地位と名声を手にしても、ヒロコがそこに安住することはない。ロンドンに支社を構え、かの地の名門ファッションスクールで学んだ国籍の異なる若いデザイナーたちを雇い入れることで自分自身やスタッフたちを刺激する一方で、1992年を最後に休止していたパリ・プレタポルテコレクションに再び参加することを決断するのである。大御所格のデザイナーが「新人に戻った気持ち」でパリに臨むことは、日仏両国のファッション界で大きな話題を呼んだ。このパリコレクション復帰をきっかけに、同じくパリに挑み始めた台湾のトップデザイナー王陳彩霞（Shiatzy Chen）とともに中華民国紡績業拓展会主催の特別イベント「Taipei in Style」に招聘され、台北でコレクションを披露することになる。

そして2010年代、アーティスト小篠弘子としての活動が本格的に始動した。パリでは、瞬く間に終了するショーという形式でコレクションを発表することを止め、間近で見て、触れることのできる、展示会形式によって半年間の成果を披露。コレクション作品とともに、オリジナルのテキスタイルも一緒に展示し、来場者にじっくりとコシノヒロコの世界を堪能いただく機会を持った。ヒロコ自身の筆によるアート作品をテキスタイルデザインに取り入れるなど、それまでもファッションデザインとアートはヒロコにとって常に密接な連動を保ってきたが、アートへの思いは近年ますます強まり、2012年にはパリの画廊Gallery Hors Champsにて個展を開催。絵画作品だけを集めたこの個展は、アーティスト小篠弘子にとってパリでの画家デビューといえるものだった。同年、プティックの銀座進出と同時にKHギャラリー銀座をオープン、さらに翌2013年には安藤忠雄氏設計の自宅をギャラリーとして改装、KHギャラリー芦屋として一般公開し、どちらのギャラリーでも定期的な企画展示によってヒロコの作品世界を披露している。

コシノヒロコは語る。「ファッションに携わっている人は、過去を振り向くのではなく常に前を向いている。これからも自分の感じることを正直に表現して、日本とか海外とかではなく、地球人としてのファッションデザイナーでいたい。」彼女の美しいファッションエネルギーに満ちた創作活動は、世界を舞台に、今も続いている。

HIROKO KOSHINO